

あいつは変わっている、いやあいつのほうが変わっている、いやいや変わっていることにかけては俺にかなうものはいない。

誉めているんだか貶しているんだか判らないのが、あるいは自慢しているんだか謙遜しているんだか判らないのが、自他共に赦す、変わっているという人の噂であろう。

単に自分（他人）とは違うから変わっているというものもあれば、世間とは違うから変わっているというものもある。

むろんいろんな変わりかたがあって、人はそれぞれ違うのは当たり前だが、世間一般と著しく違うとなれば、これは変わっているというレベルではなく「個性」というものであろう。

「変わっている」ことがすなわち「個性」なら、これほどの「個性」は滅多におめにかかれないという見本がある。

【私は自分のことを変わっていると思ったことはなかったのだが、あんまり人が変わってる変わってると言うので、どこがそんなに変わっているのか、考えてみたことがある。そして、その最たる要因は、どうやら「いのち根性が全然ない」というここにあるらしいと気がついた。「いのち根性」、これは私の造語なのだが、とくに生きていたいというふうには思わないのである。したがってそれは、死にたいということともまた少し違うのだが、死ぬのがちっとも嫌でないのが、人がなぜ死ぬのをさほど厭うのか、それが私にはわからないのである】

多くの哲学エッセイを遺した池田晶子の言葉である。

死んだらあれもできないこれもできない、だから死にたくないなんて云うが、死んだらあれをやりたいこれをやりたい、なんて欲求は無いんだから、そんなことは死にたくない理由にはならない。

死んだら彼にあえない彼女にあえない、だから死にたくないなんて云うが、死んだら彼にあいたい彼女にあいたい、なんて感情は無いんだから、そんなことは死にたくない理由にはならない。

死んだらえらくなれないかねもちになれない、だから死にたくないなんて云うが、死んだらえらくなるとかかねもちになる、なんて邪念も無

いんだから、そんなことは死にたくない理由にはならない。

これが何度も繰り返される池田晶子の理屈なのだが、こう認識できるのはやっぱり変わっているからで、云われてみればそのとおりと解ったにしても、やっぱりどうしても死にたくはない。

そうしたことは理屈ではなく、だからむしろ哲学なんかでもなく、ただ本能的に死ぬのが厭だから厭なのだ。

本当に哲学者かと驚くほどに、日本一綺麗で日本一魅力的で日本一頭が良くて、尚且つ独身で若い（もしかするとこれら以上の存在だった）池田晶子だから、あんなこと平然と云えるのかもしれないなぞとも邪推する。

実際にガンに冒されてもジタバタせずにもともな治療もせずにも淡々として死んでいったから、有言実行の先生だったと感心し納得もする。

変わっている人の代表例は、個人責任を感じない人だから、礼儀とか恩義とか格式が重んじられる冠婚葬祭に於いて、その変わり者ぶりは顕著になる。

池田晶子も冠婚葬祭のことをよく持ち出している。

例えば、葬式でどうして悲しむのだろう、死者の主体は悲しいなんて関係のない次元に在るのだから（もしくは無いのだから）ワケもわからず泣きじゃくる人々を眺めていると、笑い出しそうになって困った、なんてことを云っている。

死はかなしいことじゃないさびしいことじゃない、と諭したい例として個人体験を云々しているのだが、葬式で泣くのは死者の代弁として泣くだけのことではない、そんな単純なことではないのだ。

遺された遺族が可哀想で泣く、遺された自分が可哀想で泣く、泣いている自分に酔って泣く、周りがみんな泣いているから、もらい泣きで泣く、あるいは演技で泣く、ここで泣くのは自分の大切な役目だと思い込んで泣く、泣くのが礼儀だから泣く、などなど、まだいくらでもある。

じっさい池田晶子にあっさりと死なれて、泣きたくて仕方がない者は沢山いただろう。

本人に笑われても、やっぱり泣くしかない者は、沢山いただろう。

しかも単純に悲しく淋しいから泣いた者は沢山いただろう。

あの人は変わっているから、変わっていない者も変わっている態度を

とるなんて、そんな特別な余所行きなことなんかできない。

あれほど「死ぬのが平気だった」池田晶子が死んで、知人友人愛読者野次馬などなど、遺された者たちがみんな平気だとしたなら、変わっていることが変わっていないことになるのかもしれないが、「死ぬのが平気だった」なんて、悲しまないことの些かの理由にすらならない。